フランスに於けるスマート・スプロールの
計画技術に関する基礎的研究
-持続可能な郊外開発を探求するために-

鳥海 基樹 (首都大学東京都市環境学部建築都市コース・准教授)

[研究報告要旨]

本論は、フランスに於ける持続可能な郊外開発のあり方をテーマに、
銘醸地・サン・テミリオン、シャンパーニュ、そしてブルゴーニュを題
材に分析した。そこで得られた知見は、以下に整理できる。

1. 地方分権ではなく地方集権

とりわけサン・テミリオンとブルゴーニュで顕著だが、細分化した基
礎自治体ではなく、複数のそのの集合体に地方分権された権利を(再)
集権している。とりわけ都市計画は、生活圏という発想に立つと、一基
礎自治体の中で生活が完結することはない。教会教区に起源を有する基
礎自治体を守りつつも、権利を集約して効率的都市経営を実施する地方
集権のシステムである。

2. コンパクト・シティではなくコンパクト・マーケット

ブルゴーニュが典型だが、銘醸地ではワインの出荷などのため自動車、
さらに幹線道路は不可欠である。そこで、住宅をまとめるコンパクト・
シティではなく、商業やサービスをまとめるコンパクト・マーケット
の方が適切である。問題は、マイカー利用を前提とした屋外広告物の氾
濫で、その制御のため、シャンパーニュやブルゴーニュでは文化財保護、
サン・テミリオンでは地域屋外広告物プランが活用されている。

3. スマート・シュリンキングではなくコンパクト・スプロール

銘醸地では醸造所の散在は仕方ない。これはむしろ本来の意味でのス
プロールの形態だが、それを否定することは地域経済の否認になる。

問題は住まい方で、旧来の集落程度の規模を維持しながら、醸造所や
コンパクト・マーケットにアクセスする。旧市街地での自動車利用のた
めの集中駐車場整備や、一定のまとまりのある戸建て住宅地開発で対応
している。シャンパーニュのエペルネでは、既にこのことに1970年代に
気付いていたことが明らかになった。